God save the Queen

東京芸術劇場が、次に演劇の中核を担う才能を紹介する芸劇eyesシリーズ。その番外編として、さらに若い選りすぐりの才能を、短編作品のショーケース形式で紹介した2011年の『20年安泰。』。大好評を博したこの企画が帰ってくる。しかも今回は、5人の作・演出家がすべて20代から30代の女性。

等身大の思いを5人が答えてくれました!!
質問：演劇という表現を始めた理由。

待望の第2弾!芸劇eyes番外編『GsQ』の全容を遂に発表。

柔らかく気まぐれ、辛辣で残酷という女性的な側面を持ちつつ、男／女の二分法を無化するような強靭なクールさを備えているのが共通点で、この公演後は“女性劇作家”のイメージが一気に更新されるはず。話題集中必至のイベント名は「芸劇eyes番外編　第2弾『God save the Queen』」(『GsQ』)。9月の公演を前に5劇団を紹介。

文：徳永京子

芸劇eyes番外編　第二弾
God save the Queen
9月12日[木]～16日[月・祝]
シアターイースト

参加団体(作・演出)
うさぎストライプ(大池容子)／タカハ劇団(高羽 彩)／鳥公園(西尾佳織)／ワワフラミンゴ(鳥山フキ)／Q(市原佐都子)　※五十音順

主催：東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)
東京都／東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)
＊東京文化発信プロジェクト事業

詳細はP13へ

うさぎストライプ

YOKO OIKE

劇作家、演出家 **大池容子**

ずっと漫画家になりたいと思っていました。でも緊張すると、手がぶるぶる震えるからなれませんでした。あれになりたかったなあ、とか、これ言いたかったのになあ、とかを、これでもくらえ、という気持ちで演劇にしています。

俳優がせりふを喋りながら壁を全力で押したり、荷物を散らかしてまた片付けたり、走ったり、話の内容と関係のない動きを繰り返す。つまり体を物語と切り離して、俳優が言葉に集中し過ぎて役に酔わないよう、演出の大池容子はいつも注意を払う。劇作家の大池容子が書く物語はセンチメンタルではあるが、激しい動きで息が上がる俳優の体が、その着地点を甘い涙のような単純なもので終わらせず、苦さや乾きという後味を観客の体に残す。

『おかえりなさいII』 2012年 アトリエ春風舎

うさぎストライプ(うさぎすとらいぷ)　2010年結成。大池容子の演劇作品を中心に活動。うさぎストライプが演劇をつくるのは、やっぱり見えないものが見たいからで、いつもは誰にも見せないけど、その人の中にぎゅっと押し込められたものが見たいから、これからもきっと、そういう演劇をつくっていくんだと思います。

タカハ劇団

AYA TAKAHA

劇作家、演出家 **高羽 彩**

演劇に触れ始めた当初の原動力は「思ってた以上に褒められるぞ！」という非常に幼いものでした。今は、他のメディアよりも自分の意志をより深く作品に反映できるところが気に入っています。なにせ稽古が楽しいです。

ある事件、ある場所、ある人物に関わった人間達、それぞれの人物像と関係性を、日常的な会話を組み合わせてシャープに描き出す。と同時に、物語の後景に、新興宗教、学生運動、オタクなどの社会問題も浮かび上がらせ、高羽彩は半径の小さな話に終わらせない。参加劇団の中では唯一、いわゆるスタンダードな作風だが、何でもないせりふが、小さな鍵が大きな扉を開けるように作用していく瞬間は、演劇を観る大きな快感を与えてくれる。

『ネジ工場』 2012年 下北沢・駅前劇場

タカハ劇団(たかはげきだん)　高羽彩の脚本演出作品を企画・上演するためのプロデュースユニット。「書ける」若手作家として期待される高羽の作品は、緻密な物語性と生々しくチープでありながら叙情的な言語感覚が特徴。随所に笑いをちりばめながらどこか冷徹ともいえる終着点へと向かう物語は、現代人の抱える虚無感を描き出し大きな共感を呼ぶ。

鳥公園

KAORI NISHIO

劇作家、演出家 **西尾佳織**

演劇を選んだというより、流れ着いて、ここまで辞めることにならず来ている感覚です。自分が前に出てガシガシ作るのではなく、そこにあるものの中に道筋が見えてくるのを待つ、という時間のかけ方を出来るところが好きです。

移ろいや気配、まどろみなど、半現実、半覚醒の中で浮かび上がる状況や感覚を、劇場空間に大胆に再現。せりふ、俳優の肉体と声、照明、美術の配置を、常識的な位置からズラし、現代社会で切り捨てられがちな“○○未満”“○○と○○の中間”“○○の余剰”の魅力を有機的に示す。築100年の日本家屋など劇場以外での公演、地方での作品づくりを積極的に行っており、西尾佳織の、時間と距離に対する大きな把握力が武器になっている。

『おねしょ沼の終わらない湿かさについて』
2011年 シアターグリーンBASE THEATER

鳥公園(とりこうえん)　作・演出の西尾佳織と俳優・デザインの森すみれによる演劇ユニット。「正しさ」から外れながらも確かに存在するものたちに、少しトボケた角度から、柔らかな光を当てようと試みている。モノの質感をそのままに手渡す言語感覚と、殺伐とした世界を独特のテンポで生きるどこか間抜けでチャーミングな俳優たちの佇まいが持ち味。

ワワフラミンゴ

FUKI TORIYAMA

劇作家、演出家 **鳥山フキ**

特にきっかけ等はなく、なんとなく劇以外の事をやろうという頃がありませんでした。考えている事を、劇だと上手く言える気がします。他の手段ではひとつも上手く言えません。あとは台本を書いたり役者と劇を作る作業が好きだし、楽しいからです。

全体像や話の設定が簡単につかめない。むしろ、観客がそれにこだわるのを拒むように、スカートをふわりとひるがえす軽やかさで、ナンセンスな会話を次々と繰り出す。そのトーンはのんびりとし、美術や小道具、衣裳などのアイテムは愛らしさにあふれているが、根底に毒混じりの批判精神を感じさせるという不思議な作風。鳥山フキは5人の作・演出家の中で最年長だが、これまで密やかにしぶとく活動を続けてきた“遅れてきた新人”。

『バーン・ナ・バーン』 2011年 下北沢・café viet arco

ワワフラミンゴ(わわふらみんご)　作者・鳥山フキを中心に小規模に活動している演劇団体です。2004年「くらやみ／フランス海のまん中」で旗揚げ。奇をてらわずに不思議な世界観と思わせるのを得意にしています。エビ、カニ、ホッチキス、双子等、独自の興味や関心を優先し、楽しく気楽に見ていただける娯楽作品を作っています。

Q

SATOKO ICHIHARA

劇作家、演出家 **市原佐都子**

なにかつくりたいときに近くにあって、何回かやってみて、やっと自分のやってることがちょっとはなにかになってる気がしたので。あと、迷惑かけたり嫌な思いをすることがあっても人と関わらなければいけない場所に私は身を置いたほうがいいと思うので。

初めて演劇を作・演出したのが大学の卒業研究だったという市原佐都子。それをもとにした戯曲が2011年にAAF戯曲賞優秀賞を受賞し、今年はフェスティバル／トーキョーの公募プログラムにも選ばれるなど、順調なスタートを切る。体操のような不自然な動き、おかしな語尾がくっ付いた不真面目な話し方を、飛び道具ではなくデフォルトとして用い、現代のコミュニケーション不全とともに、普遍的な強者と弱者の対比を容赦なく照射する。

『虫』 2012年 アトリエ春風舎

Q(きゅー)　2011年より活動。市原佐都子が劇作・演出を担う。作品にはよく動物や食べ物が登場する。ニンゲンの世の中の「形」に飼い馴らされきれない、そこからはみ出している、無理している存在が気になっている。2013年秋にはF/T13公募プログラムに参加予定。